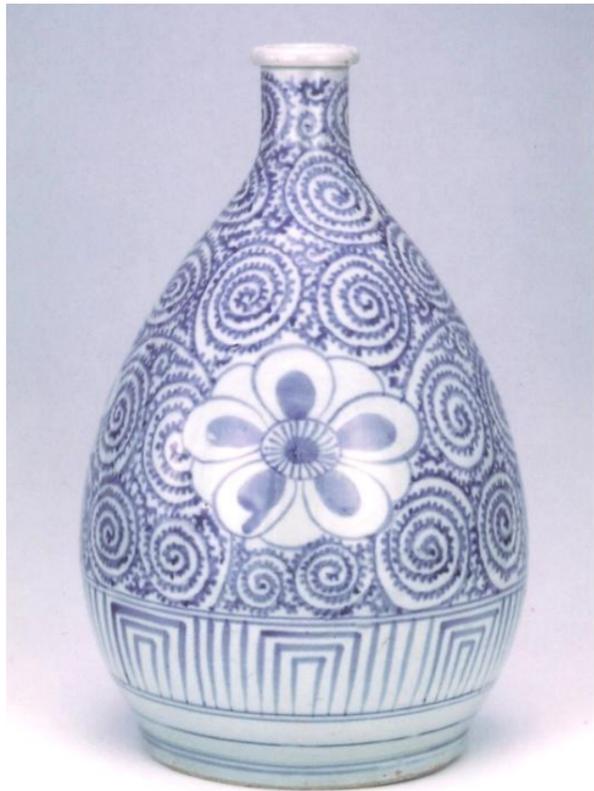


加美町

きりごめやきかまあと

切込焼窯跡





染付梅蛸唐草文らっきょう形徳利
高さ約43cm 切込焼記念館蔵

江戸後期から明治の初めにかけて、加美町の^{みやざききりごめ}宮崎切込地区で県内では数少ない磁器を中心に生産を行った窯跡があり、その製品は^{きりごめやき}切込焼と呼ばれています。

窯跡は丘陵裾南西向き斜面にあり、北西側から西山、中山、東山と呼ばれてきました。これまでの発掘調査により西山窯付属工房跡や窯の一部などが確認され、周辺からも大量の磁器片、素焼片、窯道具などが出土しています。

切込焼の開窯時期については諸説ありますが、現在発見されている記年銘をもつ最古の製品が天保6年（1835）であることや、古文書に記される最古の例から推測すると、天保初期頃の開窯と考えられています。

その後、「切込瀬戸山棟梁 山下吉蔵」の活躍により、弘化・嘉永・安政年間に最盛期を迎えます。仙台藩の援助も始まり、出資と販売を仙台の商人が担当、経営の拡大を図りました。安政4年（1857）の記録によれば、切込窯では多い時で200人が働いていたと記されています（伊達家文書）。

しかし、幕末における情勢の急変や、東北の冷害などが重なって事業は衰退の一途をたどり、明治10年代頃には閉窯に至ったと考えられます。

加美町指定史跡 平成14年1月30日